米欧亜回覧

第４１号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集　総務部会

十周年記念「国際シンポジウム」
三本柱の企画、固まる

懸案になっていた当会設立満十周年を記念する「グランド・シンポジウム」の企画が固まった。この企画の特色は、当会の三本柱ともいうべき「読む会」、「歴史部会」、「現未来部会」のこれまでの成果と問題意識をベースとし、「平成の岩倉使節団」という志をもって「世界の中の日本のあり方」を真剣に考え討議する場にしようということにある。

したがって二〇〇一年秋に催された五周年記念の「国際シンポジウム」と明らかに違う点は、「岩倉使節団」や「米欧回覧実記」そのものに関する研究ではなく、むしろそれを起点に位置付け、岩倉使節団を源流とする近代日本史の考察であり、今後の日本のあり方を問う未来志向にある。そのため、企画委員に五百旗頭真氏、芳賀徹氏、松本健一氏の三教授を迎え、当会の担当幹事とで企画をすすめることになった。

また、前回の参加者がおのずから欧米諸国中心だったのに対し今回はアジア諸国からの参加者を重視し、さらには、出来るだけ若い世代の参加を目指すことにある。

（詳細は四頁）

新年懇親パーティは、ベルギーをテーマに

二〇〇六年の新春を寿ぐ恒例の全体例会は、いまや欧州連合の中心に位置するベルギーをテーマに、夜景が素晴らしいプレスセンターの十階、レストラン「アラスカ」を借り切って行う。久米も「小パリ」と記述したブリュッセルの雰囲気を移して小粋な趣向が用意されそうで、どうかお誘い合わせの上、夫人やお嬢様も同伴でお出かけ下されば幸いである。とくに新会員の方は、この機会に是非どうぞおいでください。

Bruxelles
（ギャルリー・サンテュベール）

国際部会立ち上げ

会員の井出亜夫氏（このたび幹事に就任・日本大学教授）を中心に進められていた国際部会の準備会が、十一月十八日、市ヶ谷で開催され、若い世代も含め二十五名の多彩な人々が集まった。そして、趣旨説明のあと自己紹介がありビデオ（米国編）をみて意見交換を行った。二月には在日外国人のメンバーも巻き込んでいよいよ第一回の会合が開催される予定である。

（詳細は五頁）

十月全体例会は、憲法談義で白熱！

「憲法改正、イエスか、ノーか」をテーマとする例会が、現未来部会の担当で、十月二十九日、プレスセンターホールで開催され、会員代表二名づつが賛否に別れて自説を展開し、会場からもコメントがあって極めて興味ある会合となった。また二次会でもさらに突っ込んだ議論が行われ、充実した会になった。

（詳細は二・三頁）

「世界気運の変」と「平成の岩倉使節団」

泉　三郎

「我日本ニ於テ此典ヲ挙行セラシコトハ、実ニ曠世ノ一事ニテ、乃方今ノ時宜ハ、異常ノ運ニ際会セルコトヲ顧ルヘシ」

使節団の派遣について、久米邦武は「米欧回覧実記」の「例言」でこう書いた。

「明治中興ノ政ハ、古今未曾有ノ変革ニシテ、其ノ大要ハ三ツニ帰ス、将門ノ権ヲ収メテ、天皇ノ親裁二復ス、一ナリ、各藩ノ分治ヲ併セテ、一統ノ政治トナス、二ナリ、鎖国ノ政ヲ改メテ、開国ノ規模ヲ定ム、三ナリ」

つまり明治維新の大要として、開国、大政復古、廃藩置県の三つを挙げている。

そしてその一つでも容易ならざる大改革なのに、それが三つ合わせて行われたことは、「人為」を越えほとんど「天為」だとし、それは取りもなおさず「世界気運ノ変」によって起こったものだと述べている。つまり、この世界情勢の大変化こそが、異常ともいえる大視察団の派遣を生んだのだというのだ。

思えば、現在の日本もそれに匹敵する「世界気運の変」に遭遇している。宇宙技術や電子技術、ＩＴやバイオをはじめとする驚くべき技術の進歩が時代を大きく変え、さまざまな面で大改革を必要としている。言い換えれば我々は今、全地球的、数百年単位の大変化に遭遇し、グローバリゼーションの大波にさらされているのであり、パラダイムの大変換を迫られているといってよい。われわれは、まずその現実を明確に認識し、新しい事態に如何に対応していくかを真摯に考えていかなくてはならない。

「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」に親しんできたわれわれ学徒としては、一市民とはいえ十年に及ぶ実績を踏まえ、この際、「平成の岩倉使節団」の一員になったつもりで、志高く、二〇〇六年秋に予定される十周年記念の「グランド・シンポジウム」に臨みたいと思う。会員諸氏の格段のご尽力を期待する。

第38回 全体例会

日本の「国のあり方」を考える
憲法改正問題に取り組む
―現未来部会担当

第三十八回の全体例会は、十月二十九日（土）日本記者クラブ十階ホールで開催された。

今回は、現未来部会が担当し、「憲法改正、イエスか、ノーか」をテーマに会員による討論会形式で行われた。参加者は二十六名。

冒頭泉代表より「今回は、参加者が意外に少数だが、熱心な会員による、中身の濃い議論を期待したい。タイミングのよい企画であったと思う」との挨拶があった。

一部の会務報告では一月懇親例会のこと、DVD制作の進捗状況、国際部会の立ち上げ（井出会員を中心に準備会開催、来年より発足）、国際シンポジュウム（十周年記念事業として来年十一月に実施予定）など最近の懸案事項について報告があった。

全体例会が開催された日本プレスセンターホール

引き続き、各部会幹事より部会活動報告を行い、現未来（小田）、読む会（多田）、英文読む会（岩崎）、歴史（永富）、青年（石川、代理）、総務（山田）、各氏より簡潔に報告がなされた。

また、水澤氏より現代語訳がその後も順調な売れ行きであること（第二刷、六百部のほぼ半分を販売）などの情報が寄せられ、また、新入会員紹介（石坂氏、高木氏、小山氏）も行われた。

なお、例会終了後、新橋亭で行われた二次会にも、十三名の会員が参加、熱く、濃い議論が交わされた。

憲法改正、イエスか、ノーか

戦後六十年を経た今日、衆参両院の憲法問題調査会の報告書が公表され、更には自由民主党と民主党の改正案がそれぞれ示されて、憲法改正論議がメディアをにぎわしてる。

憲法はその国の国民の生き方を大きく左右するものと言われる。憲法改正論議を通じて今後の日本のあり方を国全体で改めて問い直す良い機会であり、現未来部会でも七月十六日、九月二十八日と二度にわたり「憲法問題を考える」というテーマで議論をした。それを受けた形で、今回は現未来部会の担当ということもあり、例会において、「憲法改正、イエスか、ノーか」というテーマで憲法問題を論じた。

論点を安全保障問題に絞り、最初に四人のスピーカーが改正賛成と反対とに分かれて、それぞれの立場から論じた。改正賛成の立場から、津田昭氏と多田幸子氏、反対の立場から、小野博正氏と山田哲司氏が論旨を展開、幹事の塚本弘氏が司会をする形で進行が進められた。

論者はいずれも会員であり、ごく普通の一般市民であって、法律の専門家でもなければ、研究者でもない。ましてや特定の政党を代弁するものでもなく、討論は正に普通の市民感覚で行われ、ある意味では現時点での日本国民の一般的な見解を示したものと思われる。

四人の論者の討論のあと、何人かのフロアーからの発言があり、四人の論者とは異なる視点の意見、コメントも聞かれ、問題の所在も浮き彫りとなり、憲法改正問題を巡る議論は更に奥の深いものとなった。

悪しき隣国に備える体制整備を」（多田幸子氏）

多くの人が平和を願い、戦争を起こしたくないと願っている。しかし、現在の日本が置かれている状況を考えると、平和主義を唱えるだけではどうにもならない危機が日本の国の身近なところにあると考えざるを得ない。だからこそ、自分の国は自分で守ることが基本となることを忘れてはならない。

想定される日本の危機とは、頻繁に起こる北朝鮮や中国による領海や権益の侵犯、北朝鮮のミサイルや中国の軍拡の脅威、中台紛争の余波がもたらす危険、大量破壊兵器を使ったテロ、などいくつも挙げられる。要するに、日本はとんでもない隣国に囲まれているという現実をしっかり認識する必要がある。常識が通らない信義なき国々が隣国なのである。だから完全な防衛体制を敷き、有事の際に即防衛できる準備をすることが重要である。と同時に道徳や正義感だけではなく、外交交渉術を高め、外交力を鍛え、毅然と相手を抑制する力をつけることも肝要である。

岩倉使節団が何故あれほど各国で歓迎され尊敬を受けたか、それは彼らが余りに毅然としていたからであると言われている。

日本の平和憲法は、世界に誇るフリーパスポートである」（小野博正氏）

日本が戦後営営と平和国家として高い評価を得てこられたのも、世界中どこへ行っても通用するフリーパスポートとして機能してきた、いわば現行平和憲法の賜物であり、それがマッカーサーに押し付けられたものであったにしても、平和国家日本のイメージ伝播に多大に貢献してきたのは事実であり、正に現行憲法は平和国家日本の根幹を成すものである。

改憲は、どう説明してもこのイメージを大きく阻害し、日本の財産の莫大な損害となる。自民党の改正案では、自衛隊を自衛軍として位置づけ、紛争解決の手段としては戦争及び武力行使は永久にこれを行わないとしているから大丈夫だ、心配するなという意見があるが、吉田元首相が言ったとおり、全て近代の戦争は自衛の名の下に行われたのであり、自衛軍だからといって戦争回避の歯止めにはならない。更に、改憲によりもっと日米同盟による兵力一本化の促進が懸念され、平和が脅かされる

誰が読んでも解りやすい憲法であるべき」（津田昭氏）

九条問題で憲法改正が呪縛状態になっている。九条は国家、国民の生存に関わる重要な条項であるが、きわめて多様に

解釈できる状態であり、決して望ましいものではない。基本的に憲法は誰が読んでも解りやすいものするべきであり、解釈に委ねて放置してきたのは政治の怠慢である。

侵略戦争はしない、その代わり侵略されればこれを徹底的に排除するという姿勢を明確にするべきである。現行憲法第九条は侵略戦争を放棄したものであり、自衛のための戦い並びに交戦権を否定したものではない、従って個別的自衛権、集団的自衛権双方を有すると解釈できるが、一方そうとも読み難い部分もあり、その辺は明確にし、国としてあらゆる事態に対応できるよう準備しておくべきである。

また九条の平和主義が日本のみに存在するかのような考え方があるが、他国の憲法でも明確に平和主義を標榜する国は多く、平和主義は日本の専売特許ではないし、国際貢献についても、もう少しポジティブに対応してはどうか、国を預かる立場にあれば現実に対処するのは当然の責務である。

歴史認識を処理したうえ、改憲問題は時間をかけて慎重に検討すべき（山田哲司氏）

「歴史認識」および「過去の克服」との関連なしには改憲問題を語ることは出来ない。日本人は曖昧性、責任の所在不明確、結論の先延ばしにより時間の経過の中で決着をつけ、物事の解決を図ることの多い民族である。先の戦争についても日本人の手による戦争の総括が終わっていないし、「過去の克服」問題についても、戦後のドイツ例と比較し、日本は十分に行われていない。

憲法九条の問題は歯止めとしての役割を重視し、戦力を持つこと自体が増殖、巨大化へ繋がるものであり、その防止の役割を九条が果たしていることを重視したい。自衛隊の存在自体は国民がもう暗黙裡に認知しているのであるから、今急いで憲法を変えてまで正当化する必要は無い。特に日本人の流れに傾きやすい特性には十分注意を要する。日本がどのような憲法を持つことが相応しいのか、今平和憲法を変えねばならない喫緊の理由は何か、時間をかけて慎重に検討すべきである。

フロアーからも幾人かの意見やコメントが寄せられた。

○水沢周氏

どの国の憲法にも平和重視は謳っているのだが、日本の憲法の独特なところは戦争放棄という点である。憲法の平和思想は理念、理想であって、現実がそうだからといって廃止するのは堕落である。

では自衛隊はどうするのか、九条に戦力は持たないとあるが今や立派な戦力である。これは多少堕落しなければならない。しかし自民党案の自衛軍は悪くない発想だと思う。これが肥大化して自衛軍が侵略軍にならない歯止めをどうかけるかが重要、しかも自衛軍は専守防衛であってほしい。

要は、理想は掲げたままにして、現実をどう保全していくかを考えることが重要、しかも誤魔化さないできちんとやることが大事。憲法は守るものではなく攻めて取るものである。憲法修正は結構だと思う。アメリカの憲法も公民権運動という形で修正を重ねてより良い憲法にしている。日本も理想的な憲法の形ではあるが、現実は空洞化している。空洞化させないことが大事である。

○永富邦雄氏

日本は大変長い歴史を持っている、その長い歴史認識に立てば日本のアイデンティティを主張するのは当然である。前の自民党案の前文にはあったが、それをもっと強調すべきである。つい最近の歴史だけをつまみ食いされて槍玉に挙げられたのではたまったものではない。

自衛隊は明らかに軍隊であり軍隊といえばよい。但し軍隊には規律が一番大事である。シビリアンコントロールがもっとも大切。我々は拡大解釈による統帥権を乱用された痛い経験を持っている。そういうことの無いように国家の基本法は明確にしなくてはいけない。

○藤原宣夫氏

中国について私の体験を話したい。王維中国大使がまだ参事で日本に来ていた頃、ある会議で各国の大使の中から中国の軍事予算が増えている、年々四％を超えている、非常に脅威であると発言した。それに対して王維さんは、中国は非常に貧しくて、教育費の予算はなかなか取れないので、教育の予算を軍ということにして教育レベルを上げているのだと説明した。それを旧東ヨーロッパの大使達が、会議の後、俺たちも昔ああいう風に言えと言われたと話していた。これが現実である。

五月にキューバに行ったが、民衆がＣＨＩＮＡと書かれている赤いシャツを着ていた。大変なＯＤＡその他、キューバには色々やっているにもかかわらずそれをかき消すようなことが行われている。こういう事実関係だけをお伝えしたい。

○小山貴氏

憲法改正議論の前に日本の脅威、日本の平和と反映を脅かすものは何かということを特定することが先ではないか。防衛庁の制服組の幹部は、北朝鮮のミサイルと北朝鮮が日本国内で行う工作活動の二点を挙げる。日本は有事法制ができたけれどもこのいずれにも対抗できない。こういう基本的なところを整備した上で憲法改正議論をすべきである。

またアメリカが日本の自衛隊にイギリス軍のようにイラクで戦ってもらいたがっているという話があったが、大変な誤解である。アメリカの対日安保政策の基本は、それは日本が考えるべき問題であるということである。

以上のほかフロアーから、憲法裁判所の設定が必要などいくつも興味深い発言があった。この日の討論で憲法改正問題は、理念と現実とをどう折り合いをつけるかが一つのポイントであることがハッキリしたが、各人各様考え方は違い、色々意見があるのは当然であり言うべくして甚だ難しい問題である。

最後に泉代表が、今日の議論はスタートであり、事実認識と理念の問題をどこまで調整しながら、歯止めの仕掛けを作っていくかが安全保障の問題の一番大きなキーだと思う。本日は、安全保障に問題を絞ったが、前文、天皇、人権、環境など多くの論点があり、これからも議論を重ねて我々の会でなにか一つの解決策のようなものが見つかればよい、そこまで我々の会で議論が進行していくことを期待したいと述べた。

「米欧亜回覧の会」設立十周年記念事業

国際シンポジウムの企画決まる

「世界の中の日本のあり方を考える」

―平成の岩倉使節団として―

本会は、二〇〇六年設立満十周年となるので、それを記念して、秋にシンポジウムを開催するということを、かねて企画中であったが、ようやく骨子が決まり幹事会でも承認された。その概要は左記の通り。

一　企画の趣意

岩倉使節団の米欧回覧は、日本近代の政治、経済、社会に決定的な影響をもたらした一大事業であり維新の革新性を示す壮挙であったが、この画期的な大視察の成果は、その志にもかかわらず、その後の歴史をみれば、健全な近代市民社会や国家の形成を順調に発展させるものとはならなかった。とりわけ近隣諸国への侵略戦争について軍部の独走を許し、米英列強との全面戦争に突入して亡国の危機に陥り、その物心両面での甚大な影響は今日もなお残存し、その後遺症から抜けきれていない状況にある。

戦後の日本社会は、占領軍による革命的諸改革とその後の国民の絶えざる努力によって、民主主義体制や市場経済システムもほぼ定着し、近代文明の果実ともいうべき豊かさや便利さを十分に享受するにいたっている。

しかし、今なお市民意識の未成熟や近隣諸国との摩擦問題をかかえ、とりわけアメリカングローバリゼイションの大波の中で日本のアイデンティティは危殆に瀕し、かつての日本が誇った美しい風土や礼節、モラル、風俗習慣は風前の灯火と化している。今日の日本は、その意味で、明治維新、戦後改革に継ぐ大きなパラダイムの変換をせまられている。

そこで、当会は岩倉使節団の市民レベルのヴォランティア研究団体として、平成の岩倉使節団の志をもって、「新しい国のかたち」、「新しいパラダイム」を模索するシンポジウムを開催したい。

2001年国際シンポジウム・公開フォーラム

二　基本テーマとプログラム概要

■メインテーマ

「世界の中の日本のあり方を考える―平成の岩倉使節団として」

■サブテーマ

（一）岩倉使節団は日本の近代化に如何にかかわったか　第一セッション

（二）日本の近代化百三十年における成功と失敗　第二セッション

（三）グローバル社会における日本の役割とは何か　第三セッション

他に、ＤＶＤ上映会も行う予定。

■企画委員

・コーデイネーター

五百頭旗真（神戸大学教授）

・メインスピーカー

〔第一セッション〕

芳賀徹（京都造形芸術大学学長）、「読む会」担当

〔第二セッション〕

五百旗頭真（神戸大学教授）、「歴史部会」担当

〔第三セッション〕

松本健一（作家、麗澤大学教授）、「現未来部会」担当

・当会代表として泉三郎、山田哲司、水沢周、永富邦雄、塚本弘、井出亜夫他

・スピーカー（候補）

ＵＳＡ、ＵＥ、アジア（中国、韓国他）、各地域から適材をスピカーとして招聘する

・当会メンバー（各部会代表）、在日外国人メンバーも参加、国際色を高める。

なお、「青年部会」、並びに「国際部会」も積極的に参加予定。

三　日時、場所

・二〇〇五年十一月二十三日～二十五日

・東京一ッ橋学術総合センター及び国際文化会館

四　参加者予定

当会会員及び参加スピーカーの推薦者、一般希望者（大学院院生、社会人、その他）各セッション百名～百二十名、公開シンポジウム約五百名、延べ参加者数約八百名

五　予算規模

八百万円、国際交流基金、東芝国際交流財団などへ支援要請し、その他を考慮。

国際部会」準備会

ＤＶＤの制作進む！　特別協賛金のお願い…

ＤＶＤ「岩倉使節団の欧米回覧」の制作は、シナリオ、画像収集、画像のデジタル収録の段階をほぼ終え、十二月中旬からいよいよ編集段階に入り、同時に資料出典先への版権・著作権使用申請などを進めている。

新ＤＶＤはこれまでのビデオに比べ、シナリオもふくらみ、画像も新しく増え、内容は一段と充実し、時間も約二時間になる予定である。

今後のスケジュールとしては、一月にはナレーションを収録、二月にはテストの編集試写を行い、三月完成をめざす。

制作担当は、シナリオ・ナレーションが泉三郎氏。映像制作と演出が足立光正氏。

資金的制約もあり、添付資料は必要最小限にとどめ、ビデオ主体に制作がすすめられている。

なお、特別賛助金については、現時点で百十三名（会員外二十三名含む）の方から、総額百九十一円のお振り込みをいただいている。ＤＶＤの編集制作作業は、その資金状況をみながら極力手作りで進められているが、それでも不足する場合は頒布によって補充することも考慮中である。そうした事情のため、特別協賛金については一口一万円でなお受け付け中なので、ぜひご芳志のあるかたはご高配いただければ幸いである（八頁、郵便振替口座へ）。

開催される

十一月十八日に開催された準備会において、米欧亜回覧の会の活動の一環として、次のようなことで国際部会（仮称）の活動を展開することが話し合われた。

戦後の日本社会は、敗戦による諸改革とその後の経験によって成熟し、その民主主義は格段に開花したが、現在の日本社会は明治維新、戦後改革に次ぐ大きなパラダイム変化をなす過程にある。この新しいパラダイムを大きく設計・開花させるには、日本近代の源流にまで戻った省察が必要であり、特に、国際社会の中における日本の役割を考えるに当たり、今日までわが国が歩んできた成功と失敗の経緯をもう一度検証してみる必要がある。

そこで、「米欧回覧実記」を一つの素材、参考に据え、東京在住を中心とした内外の識者とともに、日本近代化の功罪・明暗を公平・客観的に議論・評価し、グローバル社会における日本の役割・あり方、世界と日本の関係・あり方を展望し、また、これを通じた相互理解の促進、世界への発信を図ることが出来たらと考える。

［会議の進め方］

・会議（二ないし三ヶ月に一回）は原則英語（？）とする。

・毎回課題の設定の下に講師またはレポーターを求め、議論をし、記録する。

・その成果は来年シンポジウムに反映する。

現在外国人メンバーを選定中、来年二月にはスタートしたいと考えている。

「KBS」がスペシャル番組で報道！
そのとき、日本が誕生した
―明治の遺産―

これは韓国が外交権を日本に委譲させられた第二次日韓協約（伊藤博文を統監に任命）から百年を記念して制作された韓国放送（KBS）スペシャル番組で、前編、後編からなる二時間番組である。

この番組は、気鋭のプロデューサー黄大埈氏の演出監督によるもの、日本の近代化を丹念に取材して捉えなおしており、その中で、岩倉使節団の派遣も重要な歴史的事象として取り上げられている。

そして、その研究団体としての当会にも取材の申し入れがあったことは既報の通りであるが、このたび、その録画テープが送られてきた。

そこでは当会の活動も日本の近代化を源流から見直す市民レベルでの研究団体として、泉三郎氏のインタビューや研究会の模様が報道されている。このビデオについては韓国語の分かる人の方を招いてその解説付きで見る機会を一月十日（火）十八時より、青山のクラウン・インターチェンジにてもつことになった。希望者は

鴎外も『実記』を読んでいた？

水沢　周

第九十回の「実記を読む会」で、森鴎外も早々と実記を読んでいたのではないかという話が出た。明治一七年十月、ドイツ留学に旅だった鴎外の「航西日記」（漢文）の「亜（アデン）」の部分を読んだある学者が、そのように感じたと書いているという話である。

さっそくその日記を読んで見たところ、アデンの部分についてはかなり一般的で簡単な描写なので、とりわけ『実記』の影を感じ取ることは出来なかったが、「香港」の部分で、面白いことを見つけた。「蓋香港之名。原出葡語。盗賊之義。清人填以今字云々」というくだりである。香港の地名はもともとポルトガル語の盗賊という意味で、清の人が今の字をあてたのである」というような意味だが、これと同じことを久米は書いている。しかしそれが明らかに間違った説であることについては現代語訳の注で指摘したところである。

香港の地名の由来は、後漢のころ（紀元一～二世紀）に越人が九龍で香木を栽培していたのをこの港から積み出していたのが起源であって、はるかに古いことである。この間違いをしのまま鴎外が受け継いでいるということは、久米の説をそのまま引用したという公算がたいへん大きい。あるいはほかから聞いたことなのかも知れないが、私は鴎外が『実記』を読んでいたという説にほぼ賛成である。

もうひとつ発見があった。明治一九年に大阪で発行されている『世界旅行万国名所図絵』というポケット版の旅行記とも旅行案内ともつかない本があるのだが、そのセイロンとアデンの部分は、まがうことなく久米の文章構成をほとんどそのまま盗んだものである。風景描写も風俗描写もほとんどそのまま、久米のいささかあやしげな地名表記もそのまま使用している。また、久米はセイロンのある寺で経文の写本を作っている老僧から、その経文を買い取りたいと言って、値段の交渉をしたりしているのだが、そんな特異なエピソードも、この本の著者はそのまま自分の旅行体験として書いているのである。

まさに、これはインチキきわまる本なのだが、こんなことも明治十年代において『実記』がいかにインパクトの強い本として人々に迎えられていたかを示すよい証拠の一つと見られるであろう。

二〇〇六年 薩摩歴史ツアーの企画

二〇〇四年の松前ツアーは松前城の桜の季節に合わせて、函館、小樽、札幌を巡り、札幌で米欧回覧実記の校注者の田中彰先生を招き講演会を開催して、大変な好評を得た。二〇〇五年の長州路歴史ツアーでは下関、長府、萩、山口と伊藤博文の生家などを訪ねて、幕末の志士たちの熱い息吹を感じることが出来た。

二〇〇六年は長州の志士と共に、明治維新の最大の立役者・西郷隆盛と大久保利通を生んだ薩摩への旅を、五月中旬ごろに二泊三日の予定で企画している。薩摩は坂本竜馬とお竜さんが新婚旅行に行った地でもあり、会員の皆さまの企画アイディアも取り入れて、充実した歴史ツアーにしたい。皆さまの協力をお願い致します。一月中にでも、具体案を作成して、二月には参加者の募集をしたいと考えている。

二〇〇七年には更に久米邦武の出身地の佐賀へのツアーをも計画したいと思う。ご期待ください。

高見橋にかかる橋の上にたつ大久保利通像

尚、別途紙面にて計画案を公表しますので、皆さまのご意見をお寄せください。

（小野博正）

実記を読む会報告

連絡　クラウンインターチェンジ
Tel　03-5469-2090　Fax 03-5469-2093
info@crown-interchange.com

今年の読む会はイギリス編を読み、産業革命の最先端にあったイギリスで見聞きした使節団の新鮮な驚き、讃嘆、そして日本も一刻も早く米欧に追いつかねばならぬという焦燥感と、今からなら追いつけるという自信など錯綜した思いが伝わってくる。併行して、実記Ⅴの欧州産業別総論を有志により、読み解いた。

［第八十八回九月八日］

三十七巻のスタッホルト及びウオリッキ州のビール工場のところを阿部氏、三十八巻のバーミンガムの記を西井易穂氏、三十九巻のチェシャー州の記を磯野氏、四十巻の倫敦府後記を大澤氏が、夫々に独自の解釈と資料を準備されて、部分朗読と共に内容の説明がなされ、適宜質疑応答がなされた。泉代表より、八十八回、米寿のお祝いの挨拶あり。

［第八十九回十月六日］

九十巻の「欧羅巴州地理及び運漕総論」を小野氏担当で朗読と解説があり、次いで運送に関連して、現在海運論が展開された。まず、久米はこの総論に於いて、当時の欧州でもまだ端緒にあった、最新の「地理」的知識により、欧州全域の地形を山脈、平野、湖水、海、運河、港、鉄道、船等、鳥瞰的に大きく捉えて、自然の地形と人口の技術を有効に使った物流が如何に欧州の産業の発展と密接な関連にあるかを詳細に説いている。その人文的地理の捉え方に、久米は日本の近代地理学の元祖ではないかとの説が提示されたが、水澤氏によれば、「海国図誌」を参考にしているとの教示があった。海運論は、日本の船の歴史と世界の船の歴史との比較で、日本の船の歴史も遜色なく、むしろ西洋の大航海時代を迎える前の、中国、イスラム、日本などを中心としたアジアの海運と交易が世界に先んじていたこと、現在の海運が、再び、貿易と海運の双方で世界をリードしている実態の説明があった。

［第九十回十一月十日］

九十二巻「欧羅巴州工業総論」を工業論に造詣の深い小林養丈氏による解説がなされた。久米は実記を、啓蒙を目的に書いていること、工業では製鉄を中心とした兵器、車両、造船など重工業に詳述が多く、産業・工作機械が少ないこと。基幹産業としての各種工業の重要性、それが富の源泉であり、東洋と西洋との技術の比較、工業政策や特許にまで筆及んでいる。

［第九十一回十二月八日］

来年は実記Ⅲを読む。その初回として、パリの諸編を、多田氏、浅生氏、正木氏より好みの部分の朗読と、好きな理由の解説がなされた。水澤氏より、鴎外、諭吉の著作と、久米との関連性を実証的に解説あり。その後、忘年会となる。水澤氏に年間ご指導の感謝の念が、代表者正木氏よりなされて、読む会の米寿、卒寿を祝う。パリ駐在武官をなされた永島氏より、パリの裏と表と題して、華やかな社交とその舞台裏の数々のエピソードを聴きながら歓談して一年を終えた。

英訳実記を読む会報告

連絡　岩崎洋三
Tel &Fax　03-3488-0532
zaa96087@oak.zero.ad.jp

■十月例会

二十日、七人だったが、いつもに劣らず賑やかに開催。

「初講義」の岡部氏は英国議会にメールで照会した結果を含め他綿密な調査をして流麗な英語で報告され、圧倒された。また、北氷洋航路開拓に倒れたCaptain FranklinやWindsor城等の部分を朗読・報告した浅生氏は、遭難地点などにこだわりを見せて印象的だった。

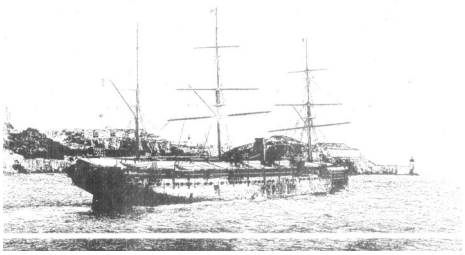
■十一月例会

八名が参加して十七日に開催。担当三名から第二巻イギリス篇の大演習、観兵式見学と陸海軍備論、小学校訪問、ロンドン塔見学、電信局、郵便局訪問、水晶宮見学の項の朗読、発表があった。

また、二十三章のポーツマス軍港見学に関連して、英国軍艦Minotaur号とHercules号に乗船していた三人の日本人の名前が小野寺さんの調査で判明した。

■十二月例会

十五日、九名が参加。三人が二十六章のリバプール一を分担して報告した後、三年目最後の読書会とて、近所の飲み屋に繰り込んで「反省会」



三原さんが入手した、使節団がマルセーユから帰航する際にのったAVA号の写真

を行った。

毎回丹念な下調べの結果を披露いただけるのが楽しみだが、今回も三原氏がマルセーユの商工会議所から取り寄せたという、使節団がマルセーユからの帰国時に乗船した船の写真や航海日誌を、岡部さんがインターネットで入手したリバプールの当時の写真や久米邦武の漢文調の表現の原典に違いないという漢籍を突き止めた結果を発表してくれた。又、森本さんや岡部さんの流麗な音読も大変心地良く聴かせて頂いた。

（文）岩崎洋三

青年部会報告

連絡　山本 陽子
mase@yhb.att.ne.jp

四月に新規スタートした青年部会は偶数月に講演会、奇数月に現代語訳の読書会を開催してきた。

十月には慶應義塾大学教職課程センター教授米山光儀先生（教育史）を招いて『高島学校から見る維新期の横浜の教育』をテーマにした話を伺い、福沢の慶應義塾と比較した際の「理念」の違いについてなど、新しい視点で明治の「人材教育」について学んだ。

このときの議論を受けて十一月には会員の鳥羽さんが「脩身論」、「教育勅語」および「教育基本法」の資料を紹介くださり、いずれも本文を読んだことが無かったメンバーは「脩身論」が「エレメンツ・オブ・モラル・サイエンス」という米国の著作物を原書としていることを知っておおいに驚いた。

十二月に今年の振り返りと来年度の方針について話し合いをした結果、しばらくは講演会と読書会を今までのペースで続けること、会の運営が軌道に乗ってきたため世話役を持ち回りにして分担することで合意し、最後は会員の石川さんと永富さんも参加した忘年会で締めくくった。

新しい年は一月六日の読書会（現代語訳第十七章から二十章）でスタートする。また、世話役のトップバッター岡松暁子さんの積極的なアプローチに神戸大学の五百籏頭先生が快諾くださり、ご講演が二月十四日に実現する運びとなった。さらには大久保洋子さんから父上にもお願いをしていただいており、充実した一年になることが予想される。

会員の皆様の参加により、さらに厚みのある議論の場になることは実証済みであり、青年部会メンバー一同ご一緒いただくのを楽しみにしている。今後ともご支援を賜ることをお願いする。

（文）山本陽子）

歴史部会報告

連絡　半澤 健市
Tel&Fax　03-3717-5576
khanzawa@dh.catv.ne.jp

九月二十一日、大日本茶道学会副会長の田中仙堂氏を講師に招く。演題は「秀吉と利休のイメージ―明治・大正・昭和における変遷」。

「黄金の茶室を好んだ秀吉、わび茶の利休」というイメージが近代日本の中で、どう確立してきたかを社会学的見地から考察し、現在のグローバリゼイションの中での伝統回帰或いは、日本主義との関連を考える。

「秀吉と利休」の問題は、幾多の文学者により、その時代時代の社会的問題意識で描かれている。利休が茶の湯を小さな茶室にとじこめ、茶席にて客人をもてなしながら心を通わせる礼の場として定着させたのに対し、秀吉は、天正年間に北野天満宮で桜の下での大茶会として、華々しく公開の場に持ち出した。

秀吉像は時代とともに変遷する。江戸期の徳川幕府は秀吉像を抑えさせた。明治になって、清国との戦争が始まると、朝鮮遠征をした秀吉が見直された。昭和十七年にマニラが陥落すると、豊太閤への報告祭と祝賀行列も行なわれた。強く、きらびやかな太閤像の復活である。

一方、利休は純粋に伝統的わびの文化を築いた人というイメージが確立するに至った。江戸時代、千家は表、裏、武者小路千家と別れて分離していった。明治になって、禄を食めなくなって、貴族や政財界人の娘たちに、嫁入り修業として茶道を教えることになった。ナショナル・アイデンティティの欲しかった明治初年から大正・昭和初年にかけての日本で、様々な権威付けが行なわれ、茶道は、禅が結びついて日本人の生活全般を律してきた総合芸術とも言われるようになる。茶室に入ると、階級とか金銭権力などあらゆる人為的装飾を脱ぎ捨てる。又、簡素を主張する。それは縮み思考にも通じる現在的問題ともつながる。

「秀吉と利休」も時代の必要とする意味付けと権威付けが加わって、初めて伝統的な考え方になる。「秀吉と利休」の問題は、現在の視点で歴史的人物や出来事を見直すときに必ず起こりうる作用で、だから、全ての歴史は現在を考えるために存在するといえるのかもしれない。

（文）小野博正

関西支部報告

連絡　北村 彰一
shou1@f7.dion.ne.jp

■例会報告

十月十八日、十五名が参加。

シカゴを出発してワシントンへ向かう使節団と体験を共にする。時空を越えて、時には一行の気持ちになって当時の日本人の視点で見て感激を共有したり、また現状と比べてその変化や変貌に驚いたりした。

当時、鉄道用の鉄鋼需要で隆盛を極めたが今はITの町に変貌したピッツバーグを過ぎ、ついに大陸を横断して大西洋に面した港町として帆柱林立し繁栄するボルチモアを見て感激する。だが今のこの街の治安の悪さを当時は想像するすべもない。

久米は大陸横断の過程でアメリカの実情をよく観察、分析して来ており、例えば開拓地の境界に木柵が廻らされ機械が使われていることから、開拓の初期投資に相当額を要することを見ている。入植者がただ同然で入手した土地を徒手空拳で開拓して行くという我々の牧歌的とも言える西部開拓のイメージが当時の実態とは異なることを教えられる。

（文）難波　康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会　員　上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回くらい全体例会をもちます。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

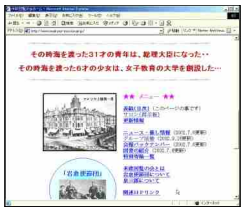
会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員（年会費3, 000円）の特典もあります。

事務局　「イズミ・オフィス」に置きます。

〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会



・・・・ホームページのご案内・・・・

◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー　など

＊皆様のご意見をお聞かせ下さい

http://www.iwakura-mission.jp

＜催し案内＞

2006年1月～3月の予定です

☆新年懇親例会

日　時：1月20日（金）18:00開場、18:30開宴
場　所：アラスカ（日本プレスセンター10階）
千代田区内幸町2-2-1
電話　03－3503－2731
テーマ：ベルギー
会　費：8000円（同伴者も同額）

（ベルギービールとムール貝が待っています！）

☆実記を読む会

日　時：1月19日（木）18：30～21：00
夕食後、第49巻ベルギー国総説、ベルギー国の期・上下
2月 9日（木）
3月 9日（木）
場　所：南青山クラウンインターチェンジ
電話　03－5469－2090
会　費：3000円（夕食・飲み物代含む）

☆英訳実記を読む会

日　時：1月26日（木）18：30～21：00
場　所：財）統計研究会会議室
港区新橋1-18-16　日本生命ビル７階
電話 03－3591－8496

☆青年部会

◆読書会
日　時：1月 6日（金）
日　程：現代語訳第17章～20章
◆小セミナー
日　時：2月14日（火）
講　演：五百頭旗真氏（神戸大学教授）

☆関西支部例会

日　時：　月　日（木）
場　所：神戸大凌霜クラブ会議室

編集後記

◇二〇〇五年、予想より少し早く日本の人口が減少に転じました。誰もが当然としてきた前提条件の一つが消え、分水界に立っていることを感じます。どの河川が本流となるのか、また、なるべきなのか、五十五年体制以来の憲法改正に関する議論に無関心ではいられません。

◇当会は、成熟期に入った日本社会と同様、「高齢化」の問題を抱えていました。しかし、若い会員を中心にした青年部会が発足し、一年を待たずして活動を軌道に乗せるという画期的な二〇〇五年となりました。

引き続き、国際部会（仮）が二〇〇六年二月にスタートすることになり、十一月の準備会に二十五名の会員が参加しました。当会の底流に生じた、新たな時代に向けたうねりは、確かで大きなものと感じます。

◇二〇〇六年十一月に設立満十周年を記念して開催を予定している国際シンポジウムの企画が決まりました。アナログとしか言いようのないスライドを一つの有力なメディアとした当会ですが、DVDという新時代のメディア制作に挑戦中です。物心両面のご支援をお願いします。（N）